

『そばにいるなら触りたい』

著：高月まつり

ill：天王寺ミオ

「いい匂いがする。……外国的組み合わせですね。ところで、シナモンは入っていますか」

新しい浴衣に袖の長いカーディガン、髪はボサボサの長いままという不思議な格好の男が、食べ物の香りに釣られて、ふらふらと座敷に入ってきた。

大地は「誰だこいつ」と、心の中で突っ込みを入れる。

「佐藤先生こんにちは。今朝、メールで原稿を受け取りました。ありがとうございました」

吉野は、センス皆(かい)無(む)の服を纏った長身の男に挨拶をした。

……は？ マジ、ですか。

大地は、座卓を挟んで向かいに腰を下ろした男を観察する。

浴衣を着ていると肩幅があるのが分かる。長身なのでスリムに見えるが、意外としっかりした体のようだ。着やせするのだろう。

しかし、だがしかし。

目の前の本物が、自分が読んだ話から想像した「佐藤義隆」とはかけ離れていて、大地は正直がっかりした。

大地の想像していた佐藤義隆とは、「銀(ぎん)縁(ぶち)眼鏡に華奢な体格、髪や肌の色は淡(あわ)く、いつも控えめで、伏し目で微笑んでいそうな優しい文学青年」だった。

どこからか「夢を見すぎだ」と突っ込みが入りそうだが、著者近影が公開されていない作家のファンの気持ちはこんなものだろう。

ヤバイ。想像と真逆のものが来たぞ。これを見たあとで、この人の小説群のビジュアル化が出来るのか？ あーあー……夢破れた。これじゃ文学青年でなく、ただの文学オタクだ。

大地は心の中で、ボソボソと文句を奏(かな)でた。

「あの……シナモン……」

義隆は、答えないまま黙っている大地に、再び声をかけた。

「あ、ああ、シナモンは入ってないそうです」

「よかった。……嫌いなんです」

義隆は右手で前髪を掻き上げ、無邪気な笑顔を見せる。

「……っ！」

大地は息を呑む。前髪を上げて容姿を見せた義隆に釘付けになった。

これもまた「泥(でい)中(ちゅう)の蓮(はす)」とでも言うのだろうか。いや、違う。むしろ「掃(は)きだめに鶴(つる)」だろうか。義隆は、正解ではないが言いたいことは分かる言葉を、頭の中に次から次へと思い描く。

外見は大いにストライク。何度もストライク。ど真ん中過ぎて笑ってしまう。カラーコンタクトを入れたような大きな黒目に、細い鼻と顎(あご)。だが女性っぽさはなくて、むし

ろ筋(すじ)張(ば)って男らしい。無造作に伸びた髪は、彼が少し動くたびにサラサラと揺れて気持ちよさそうだ。触りたい。年の頃は同年代か数歳年上だろう。肌が艶(つや)々(つや)だ。……だが、作品のイメージと重ならない。こんな綺麗な顔で、バイオリンものを書いたり、内臓が飛び散るスプラッターを書いたりするのか？ それでいいのか？ 勿(も)っ体(たい)ない。

大地は、「だが、俺好みの性格だったら恋しよう」とバカなことを思いながら、義隆の一挙一動を見逃すものと気合いを入れた。

義隆はケーキの箱を開けてアップルパイが入っていることを確認する。「アンダー・ザ・ローズは秘密の話と言われるが、アンダー・ザ・アップルは何のメタファーか知っていますか？」

いきなり語り出した義隆に、大地はきょとんとした。「ローズの方は有名ですけどね、アップルの方は知りません」「セックスを指すんですよ。リンゴは豊(ほう)饒(じょう)の象徴であるとともに肉欲の象徴と言われています。古代ゲルマンでは……」「まったくお前は、生活に役立たないネタばかり覚えて！ どうせ覚えるなら『お祖(ば)母(あ)ちゃんの知恵袋』を覚えろ。……というか、よく一人で人の輪(わ)に馴(な)染(じ)んだな」

田島が意外な顔をして座敷に入ってきたので、義隆は口を噤(つぐ)んだ。「食べ物に……その、誘われたようです。それに、楽しそうな声もした。そしたら、待っているのが馬鹿馬鹿しくなってしまう。……で、君は誰でしょう」

義隆は視線を田島から大地に移し、そっと大地に顔を寄せ、「美形です」と感想を漏(も)らす。

「ありがとうございます、佐藤先生」

ようやく自分に意識を向けてくれたかと、大地はキラースマイルで対応する。「え……？ あ、ああ……私は佐藤義隆です。ペンネームです。本名も名乗った方がいいですか？ それとも秘密のまま？ 田島さん、こういうときはどうしたらいい？ 私は」

どうでもいい知識の時は堂々と話すのに、普段の会話が壊滅的だ。

義隆は話している途中で、傍(かたわ)らの敵(てき)ついオカン……ではなく田島に助けを求めた。

「深呼吸をして落ち着け。その間に俺は、このアップルパイを切り分けてくる」

「私を一人にするんですか？ 酷(ひど)い先輩だ。落ち着くまでここにいなさい。お願いします」

命令なのをお願いしている義隆がおかしくて、大地は「ぷっ」と噴き出した。

可愛い。どうしよう、もの凄(すご)く可愛い。その天然ボケっぷりがたまらなくいい。田島さんではないが、生活に大事な知識なんて少しも覚えてないんだろうな。お姫様みたいだ。可愛い。自分の物にしちゃいたい。さて頑張ろう。

大地は心の中で、ドレスを着た義隆を姫抱っこした。

そして、この思いをもって具現化させようと努力することを誓う。

不安そうに田島の後ろ姿を見ていた義隆に、大地は優しく声をかけた。

「先生。私は、あなたの書いた物語を立体ビジュアル化させるスタイリスト、長谷崎大地です。これからよろしく願いいたします」

大地は義隆に名刺を手渡した。

「申し訳ない。私は名刺を持っていないんです」

「お気になさらず」

大地はとびきりの笑顔で微笑む。

義隆はのほほんとしているが、吉野は「だめ。その笑顔」と呟いて顔を真っ赤にした。「立体ビジュアル化というのは……具体的にどうということなのか教えてほしい。了解したものの、今ひとつピンとこないんです。そして私は、メディアミックスの打ち合わせに出席するのは初めてで、緊張しています」

義隆は最後に本音をちらりと見せて、右手で長い前髪を掻き上げた。

中途半端の長さの髪が、指の間からサラサラと流れ落ちる。

その仕草が妙に色っぽい。

浴衣にカーディガンはちょっと変だが、これから自分が直してあげればいいと、大地はそう思った。

「佐藤義隆の小説に出てくるキャラクターの、コスプレと撮影会ってところでしょうか。簡単すぎました？」

「そう言ってもらえるとよく分かる。コスプレか……。内臓が飛び出たり、血が噴き出したりもしますか？ そういうのも見たい」

「内臓はNGです、先生」

吉野がキツパリと言う。

「それは残念です……」

義隆のしょんぼり顔を見た途端、大地は座卓に両手をついて身を乗り出していた。

そんな可愛いしょんぼり顔を、俺以外の誰にも見せないで……と、心の中で叫びながら。

「残念ではありません。先生が満足するものを作るんです。主に私が。期待してくださいというか、期待しなさい。大船に乗って。絶対に酔わせたりしません。安全運転です」

大地は、右手を胸に当て誓いのポーズを取る。さすがは元モデル、キザなポーズを嫌みなくやってのけた。

「タイタニックの方がロマンティックじゃない？」

山田が茶々を入れる。

吉野は唇を尖らせて「縁起でもない」と突っ込みを入れた。

「……そうか、長谷崎さんがそこまで言うならよろしく願います。私は、兄や弟と違って着るものに無(む)頓(とん)着(ちやく)なので」

「それは見ていればよく分かります。しかし浴衣は色っぽくていいですね。先生の浴衣姿は最高です。そして、俺のことは大地と、呼び捨てにしてください。是非」

ついさっきまでは、史上最悪のコーディネートだと思っていたことは棚(たな)に上げ、大地は義隆を褒め称(たた)える。

「ありがとう」

義隆は照れくさそうに笑みを浮かべ、小さく頷いた。

本文 p38～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>